実践 2 面談指導の強化

岡山県立倉敷青陵高校

生徒に考え、語らせるカウンセリング型の面談で、生徒の内なる変容を促す

岡山県立倉敷青陵高校では、生徒との面談を「キャリアカウンセリング」という名称とし、生徒に自分の内面に向き合わせて、その考えを語らせ、教師はじっくり聞く、カウンセリング型の面談を行っている。生徒自身の言葉で将来や志望について語らせることで、高い志望を選択する支援をしている。

生徒が自身の生き方を考え、その実現に向けた課題に気づく場に

県内でも有数の進学校である岡山県立倉敷青陵高校は、生徒の志望をより大切にした進路指導を行っている。進路指導課長の田中誠一郎先生は、そのねらいを次のように語る。

「生徒の志望は、自身の夢や思い描く未来を踏まえたもの、最大限に努力して達成するような高いものであってほしいと考えています。そうした志望を持てるようになるためには、自分の内面を客観的に捉え、今後どういう生き方を望んでいるのか、大学で何を学びたいのか、その志望を実現するために自分に何が足りないのかを、自分の言葉で語れるようにすることが必要です。自身の夢や思い描く未来を踏まえた進路であれば、必然的に高い志望となります。そこで、生徒と1対1で向き合う面談で、生徒が自身の課題に気づき、目標達成に向けた道筋を描けるような指導をしようと考えました」

同校では、以前から生徒との面談を重視してきたが、必ずしも生徒の自己認識を促し、主体性を引き出す場になっていたわけではなく、教師の方から生徒の課題を指摘し、叱咤激励する場になるケースも少なくなかった。

また、1年次から進路学習を積み重ねてきても、自身の将来の希望を答えられない生徒もいた。そうした生徒の中には、模擬試験等の成績が下がると弱気になり、合格可能性が低いという理由だけで志望校を変えてしまう者がいることも、進路指導上の課題だった。そこで、2018年度から、生徒との面談を「キャリアカウンセリング」という名称とした。

「生徒が自身のキャリア形成の視点で進路を考えているかどうかを、教師は面談でしっかり確かめなくてはいけません。面談を『キャリアカウンセリング』という名称にすることで、キャリア教育の視点とカウンセリングマインドを持った面談に、全校的に転換することをねらった

岡山県立倉敷青陵高校

◎校名の由来は「永遠の理想を追求する青春の陵（おか）」。「文武不岐」をモットーとし、「高質な学力の養成」を学校経営目標に掲げる。部活動では、弓道部や陸上部、競技かるた部などが全国大会で活躍。
◎設立　1908（明治41）年
◎形態　全日制／普通科／共学
◎生徒数　1学年約320人
◎2019年度入試合格実績（現浪計）国公立大は、北海道大、東京大、名古屋大、京都大、大阪大、神戸大、岡山大、九州大などに228人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大、同志社大、立命館大、関西学院大などに延べ387人が合格。
◎URL　http://www.seiryo.okayama-c.ed.jp

進路指導課長
田中誠一郎
たなか・せいいちろう
教職歴25年。同校に赴任して5年目。学習指導研究室。

進路指導課主任
岡本崇志
おかもと・たかし
教職歴15年。同校に赴任して11年目。学習指導研究室。

進路指導課主任
湯浅太一
ゆあさ・たいち
教職歴15年。同校に赴任して5年目。ICT活用推進室。

ものです」（田中先生）

年間行事に組み込まれているキャリアカウンセリングは、年5回（4・6・9・11・1月）で各10日間。キャリアカウンセリングという名称にした後も、実施の時期や頻度は以前のままとした。実施の時間帯は昼休みや放課後で、全生徒を対象に行う。

3年次は、それに加えて7・10・12・1月の進路検討会の直後に保護者懇談（三者懇談）も実施。以上が定期的なものであるが、面談自体は、必要に応じて随時行っている。

学年・時期ごとのキャリアカウンセリングの主なテーマは、進路指導の年間計画の中に示している（図1）。例えば、1年次の7月は「1学期の締め→文理選択への意識」、2年次の4月では「連休前後・中だるみの回避」、3年次の5月は「引退後の焦り」と、生徒の状況や行事などを考慮したテーマとしている。

図1　3年間の進路指導と、キャリアカウンセリングの時期とテーマ例

	第1学年	第2学年	第3学年
目標	学校活動への適応 適性、能力に基づく文理選択 期限を区切って成功体験	志望校群の設定 文系／理系らしい学力 受験学年に向けての意識づけ （難関大学志望者は早めのスタート）	併願大学の組み合わせの確定 実力の見極め カウンセリングを通じて学力／心境のフォロー
4	ビギニングセミナー・模擬試験 【入学直後・習慣形成】 1日総合学習	ビギニングセミナーⅡ 【春季休業中の過ごし方】 【連休前後・中だるみの回避】	ビギニングセミナーⅢ 実力考査　進路希望調査 模擬試験
5	【連休明け】 地域総体　中間考査 【中間考査の結果】	【連休明け】 地区総体　中間考査	【連休明け】 地区総体　中間考査 【引退後の焦り】
6	実習生講演　県総体 実力考査　進路希望調査 進路 LHR 【実力考査の結果】	実習生講演　県総体 実力考査　進路希望調査	県総体　実力考査 進路希望調査　模擬試験 【センター試験／個別学力検査の学習方針】
7	期末考査　模擬試験 保護者懇談　模擬試験 【1学期の締め→文理選択への意識】	期末考査　模擬試験 保護者懇談 【夏季休業に向けて】	期末考査　模擬試験 第1回検討会 【三者懇談　夏季休業中のテーマ、志望校の広がり、推薦入試の布石】 模擬試験
8	Future Watching（職場） 【夏季休業明け】 青陵祭準備	Future Watching（大学） 【夏季休業明け】 青陵祭準備	サマーセミナー 【夏季休業明け・個別学力検査への対応力養成（特に難関大学）】 模擬試験　青陵祭準備
9	青陵祭 【青陵祭明け】 学習実態調査　進路希望調査 文理選択予備調査 【文理選択予備調査前後】	青陵祭 【青陵祭明け・受験生への変身】 実力考査　進路希望調査	青陵祭 【青陵祭明け・切り替え・模擬試験への意識づけ】 実力考査　進路希望調査 模擬試験
10	模擬試験 合同保護者会【保護者会後】 模擬試験	科目選択予備調査 模擬試験	第2回検討会　模擬試験 【推薦・個別学力検査・併願大学の組み合わせ・センター試験対策の時期】 模擬試験
11	【実力考査前後】 実力考査　進路希望調査 【期末考査前】	【実力考査前後】 実力考査　進路希望調査	【実力考査前後】 実力考査　進路希望調査 推薦入試
12	期末考査　保護者懇談 【保護者懇談前後】 【冬季休業前】	期末考査　保護者懇談 【保護者懇談前後】 【冬季休業前】	期末考査　第3回検討会 【併願パターン・二次科目】
1	【冬季休業明け】 模擬試験 【実力考査前後】 実力考査　進路希望調査	【冬季休業明け】 【3年生0学期】 模擬試験 実力考査　進路希望調査	センター試験　第4回検討会 【出願指導・個別学力検査の見極め・今までの経緯】
2	模擬試験	模擬試験	個別学力検査指導
3	学習会 模擬試験 【春季休業前・中だるみの回避】	模擬試験 【春季休業前・先行スタート最後のチャンス】	【最後まで粘る】

【　】内は、キャリアカウンセリングのタイミング・テーマ例。　＊学校資料を基に編集部で作成。

教師が話しすぎて、生徒が考える機会を奪わない

キャリアカウンセリングを効果的に行うポイントは、生徒が自分で考え、語る場にすることだと、進路指導課主任の岡本崇志先生は語る。

「教師は、つい一方的に助言をしてしまいがちですが、それでは、生徒は受動的に話を聞くだけで、教師の助言の枠を超えて考えることはできません。結果的に、生徒の可能性を狭めてしまうことになってしまいます。教師は、言いたいことがあっても、いったんはぐっとこらえ、生徒が自分の考えを整理し、それを言葉にするのを根気強く待つ姿勢が求められます。長い沈黙が続くことがあっても、それでも待つのです」

生徒に考えさせるためには、その場で無理に結論を出させないようにすることも重要だ。せっかく面談をしているのだから、生徒も教師も何かしらの方向性を決めようとしがちだが、必ずしも1回のキャリアカウンセリングで結論を出す必要はないというのが、同校の方針だ。

また、考えることを生徒に委ねたため、面談時間が長引かなくなった。

「教師が生徒に合った方策を考え、納得のいく結論を出そうとすれば、当然時間はかかります。しかし、キャリアカウンセリングでは、必ずしもその場で結論を出すとは限りません。生徒が結論を出せないなら、『1週間考えてみたら』と生徒に投げかけ、潔くその日のカウンセリングは切り上げています」（田中先生）

内省を繰り返し、自己分析力やメタ認知能力を高める

教師がジャッジをしないことも、キャリアカウンセリングの重要なポイントだと、田中先生は言う。

「時に、教師は生徒から信頼を得ようと、自身の価値観に基づいて生徒の行動や考えを評価しようとすることがあります。しかし、カウンセリングは、あくまで生徒自身に自己認識を深めさせ、内面的な成長を促す行為です。教師の主観に基づいたジャッジをするのではなく、客観的なアセスメントを返す場であることを意識するようにしています」

キャリアカウンセリングで教師が重視しているのは、生徒に自身の状況をメタ認知させるための問いかけだ。例えば、成績不振に悩む生徒に、「ここができていないね」「この点数で志望校合格は大変だよ」と言うのではなく、「今どんな気持ち？」「自分に足りないものは何かな？」など問いかけることで、生徒自身に課題に気づかせるようにしている。

「教師が生徒を変えるのではなく、生徒自身が『自分は変わった』『ここを変えよう』と思えるような声かけが大切です」（岡本先生）

教師が問いかけても、課題に気づけない生徒には、専門的な立場から助言する。その際も、「○○をしなさい」といった指示ではなく、校内実力テストや模擬試験の結果を生徒と一緒に見ながら、「どこが課題だと思う？」「これから何をすればよいかな？」と内省を促す。

また、課題の対応策を考えられない生徒には、「同じ部分でつまずいている生徒は、○○することで解決する場合が多いよ」「先輩の体験を見ても、合格した人はこの時期にここまでできていたよ」と、教師の経験の中から事例を示す。進路指導課主任の湯浅太一先生は、こう語る。

「教師の助言をどう受け止めるかは、生徒次第であり、本人が納得しなければ変容は起こりません。生徒自身に判断させ、その後の行動を教師は見守る。そうした内省の繰り返しが、生徒の自己分析力やメタ認知能力を高めていくと考えています」

内面を揺さぶられる経験がその先の人生の糧に

生徒が志望理由を明確に持てるようにすることも、キャリアカウンセリングの目的の1つだ。

同校では、2年次の2学期に、今後の努力で十分合格が見込める「実力相応校」を基準に、さらなる努力が必要でも本当に入りたい「チャレンジ校」と現状維持で合格可能性の高い「合格確実校」を確認させ、「チャレンジ校」を志望校群における第1併願パターンとして意識させて志望校群を考えさせる。そうした指導もあり、3年次までに大半の生徒は志望校が明確になるが、それが本当に志望する大学なのかを突き詰めて考えさせる場を3年次に設けている。

その1つが、3年次5月に行う志望理由書の作成だ。大学で学びたい学問や、それが将来にどう結びつくのかを800字にまとめる活動を通じて、志望校への思いを強くする生徒もいれば、志望理由があいまいだったと気づき、悩む生徒もいる。

「志望校への強い思いがあれば、厳しい状況になっても意志を貫こうと努力し、結果的に合格可能性が高まります。面談を丁寧に行っているからか、この時期にすらすらと書ける生徒が多いです」（湯浅先生）

志望理由書の内容があいまいな生徒には、個別に「大学で何をしたいの？」「志望を実現するためには、次の模擬試験で何点取る必要がある？」などと問いかけ、なりたい自分をイメージさせるとともに、今の自分と理想とのギャップに気づかせることで、生徒の変容を促している。

教師と対話を積み重ねても、明確な理由がないまま志望校に合格し、進学する生徒もいる。それでも、生徒がキャリアカウンセリングを通して自分自身と向き合った経験は無駄ではないと、田中先生は強調する。

「自分の可能性について考えたり、自分の思い描くキャリアと実社会を照らし合わせたりすることは、生徒の成長にとって必要なプロセスであり、結論は出なくても、そうしたプロセスを経験することが重要です。

将来、人生の岐路に立った時、自ら未来を切り開いていけるようにするためにも、キャリアカウンセリングでは、生徒の心を揺さぶり、葛藤させる場を意図的につくっています」

生徒の発言を記録するカルテで連続性のある進路指導を実現

同校の教師は、平均年齢が50代とベテランが多い。指導経験が豊かで、自分なりの面談スタイルを持っているため、当初はキャリアカウンセリングへの転換に戸惑いの声もあった。そこで、19年5月、高校での勤務経験のあるキャリアコンサルタントの講演会を行った。当日は、講演以外に、参加者が教師役・生徒役となってカウンセリングのロールプレイングも行い、カウンセリングで求められるマインドやスキルを学んだ。

教師同士でカウンセリングスキルを高め合う機会も設けている。同校は2人担任制のため、キャリアカウンセリングを担任2人と生徒1人で行う場合もあれば、クラスを半分に分けて1対1で行うこともある。若手教師や異動してきたばかりの教師は、同校の赴任歴の長い教師とペアを組み、2対1でキャリアカウンセリングを行うことで、カウンセリングのノウハウを共有している。

職員室は、学年団ごとに机が配置されており、キャリアカウンセリングの時期には、職員室のあちこちで生徒と教師が向き合う姿が見られる。教師がどのような姿勢で生徒に接しているのか、どんな話をしているのかを見聞きでき、それらも教師の学びにつながっている。

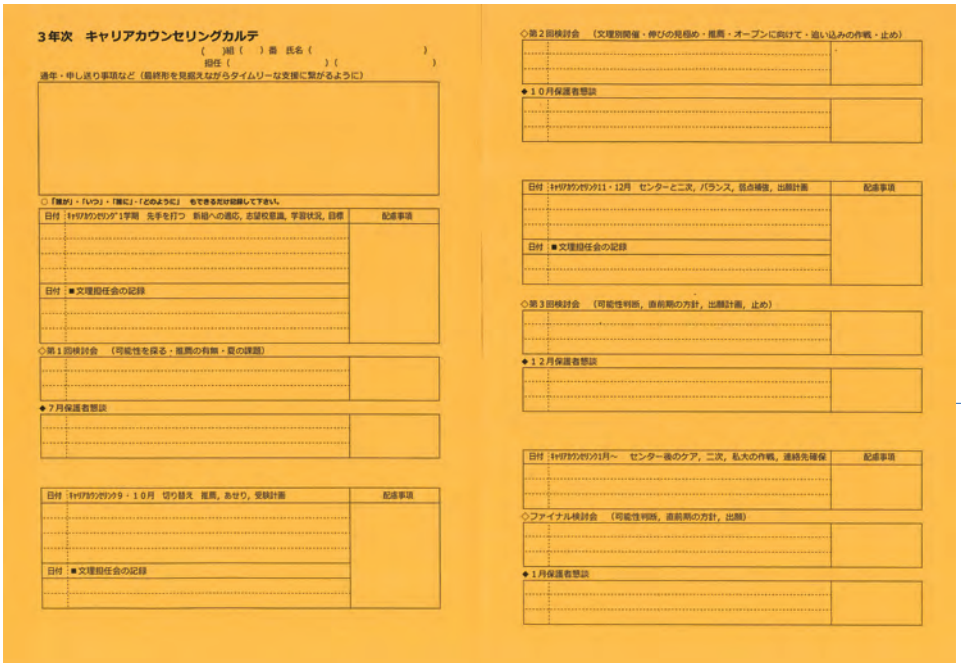
キャリアカウンセリングや保護者懇談の内容は、生徒一人ひとりの「キャリアカウンセリングカルテ」に記録する（**図2**）。カルテの書式は、全学年で統一し、進級時には次の担任にカルテを渡して、生徒の志望や内面の変化を学年を超えて共有し、指導に生かしている。同カルテは、教師のカウンセリングマインドを高める面でも効果があるという。

「カルテに記録された生徒がカウンセリング時に語った内容から、教師がどのように生徒と接してきたのかが分かります。そこで、生徒の言葉を改めて捉えて、生徒が考えを深められるカウンセリングができているのかを振り返り、次のカウンセリングに臨んでいます」（岡本先生）

新しい入試制度の下、受験をすることになる高校2年生。その変化を成長の糧にしてほしいと、田中先生はエールを送る。

「難関大学に合格したから、手に職をつけたから、一生安泰という時代ではもはやありません。変化に応じて自身を柔軟に変えるしなやかさや、打たれ強さがより求められる社会になっていく中で、それを試されているのが今の高校2年生なのかもしれません。変化を乗り越えることで、自ら人生を切り開いていく力を身につけてほしいと願っています」

図2　3年次「キャリアカウンセリングカルテ」



キャリアカウンセリングで生徒が語った内容や、教師の気づきを記録する「キャリアカウンセリングカルテ」。年間計画に組まれているキャリアカウンセリングについて、実施月とテーマが記載されている。
＊学校資料をそのまま掲載。